

放	屁	論	同	後	篇	痿陰隱逸傳
力	婦	傳	蛇	蛻	青大通	於千代傳

風來六々部集

前編

風來先生書捨て給ひし反古を太平館主人拾集めて六部集といふ其言意外に出で一家の文法古今獨歩といふべし今に至りても我人共に見んことをほりすしかるにかの集はやくより世にともしくなりもて行くまゝにこたび櫻木に彫り猶殘れる花をもあつめて六部を増補し前後四卷となし六々部集とはなりぬ

餘貨樓銅多言

風來六部集序

時に遇はざれば孔子もお茶を引きたまひ、管仲が鞍替も能い所へ乗込めば、桓公の揚詰と成つて遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人、宿昔青雲の梯を踏失して、天竺浪人と成りしより、滄浪の水滌に濁醪の世の酔を醒し、吐散したる酒反吐は、酔うた浮世に廻さるよ、酔潰共に目を明す、太平樂の巻物を、繚の本に書きつどめ、世に行はると物六巻あり。頃日書林太平館、其小冊にして讀足らず、且ちよほくさと數多きは、回覽するの煩はしきを厭ひ、六部を合して二巻となし、是を號けて風來六部集と題す。全く殘口が無駄書を八部せんとするには非ず、唯是會刻の六部に御放施。

于時安永九年五月十八日下界隱士天竺老人頼みもせぬに筆を採る。



放屁論自序

屁てふもののある故に、への字も何とやらをかしけれど、天に霹靂あり、神に幣帛あり、鷹に經緒有り、船に艦あり、草に女青あり、虫に氣鬚あり、狐、鼯鼠の最後屁は、一生懸命の敵を防ぐ。人として放らずんば、獸にだも如かざるべけんや。放つたり臭いだり屁たる君子ありといへば、強ちこれを賤しむべからず。今評判の撒案漢、論より證據兩國橋。

風 來 山 人 誌

放 屁 論

人參呑んで縊る癡漢あれば、河豚汁喰うて長壽する男もあり。一度で父なし子孕む下女あれば、毎晩夜鷹買うて鼻の無事なる奴あり。大そうなれど嗚呼天賦命歟。又物の流行と不流行も、時の仕合不仕合歟、又は趣向の善悪によるならんか。柏庭が氣どり、慶子が所作事、仲藏が功者、金作が愛敬、廣治が調子、三五郎がしこなし、梅幸浪花をひしけば、富三東都に名を顯し、川口の參詣、淺草の群集、深川の角力、吉原の俄、沙洲は木挽町に河東節の根本を引むれば、住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る。或は機關、子供狂言、身ぶり聲色辻談議、今にはじめぬお江戸の繁榮、其品數へ盡しがたき中に、さいつ頃より、兩國橋の邊に放屁男出でたりとて、評議とりく町々の風説なり。それ熱熱惟みれば、人は小天地なれば、天地に雷あり人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し時に撒るこそ持まへなれ。いかなれば彼男、昔よりいひ傳へし階子衆數珠積はいふもさらなり、礎すががき三番叟、三ツ地七艸祇園囃、犬の吠聲、鶏窠、花火の響は兩國を敷き、水車の音は淀川に擬す。道成寺、菊慈童、はうた、めりやす、

伊勢音頭、一中半中豊後節、土佐文彌半太夫、外記河東大薩摩、義太夫節の長き事も、忠臣藏矢口渡は望次第、一段ツツ三絃淨瑠璃に合せ、比類なき名人出でたりと、聞くよりも見ぬ事は咄にならず、いざ行きて見ばやとて、二三輩打連れて横山町より兩國橋の廣小路、橋を渡らずして右へ行けば、昔語花咲男と、ことごとく職を立て、僧俗男、押合ひへし合ふ中より、先看板を見れば、あやしの男尻もつたてたる後に、薄墨に限取りて、彼の道成寺三番叟などと、数多の品を一所に寄せて置きたるさま、夢を置く筆意に似たれば、此沙汰知らぬ田舎者の、若し來掛りて見るならば、尻から夢を見るとや疑はんと、つぶやきながら木戸をはいれば、上に紅白の水引ひき渡し、彼放屁漢は噤方と共に小高き所に座す。その爲人中肉にして色白く、三ヶ月形の撥鬢奴、縹の單に緋縮緬の襦袢、口上爽にして憎氣なく、噤に合はせ先最初が目出度三番叟尻、トツパヒヨロロ、ピツピツと拍子よく、次が雞東天紅をブ、ブウブウと撒分け、其跡が水車、ブウウウと放りながら、己が體を車返り、左ながら車の水勢に迫り、汲んではうつす風情あり。サア入替りくと、打出しの太鼓と共に立出で、朋友の許に立寄り、放屁男を見たりといへば、一座舉りてこれを論ず。或は樂を用ひて放るといひ、又は仕掛の有るならんと、衆議さらに一決せず。予衆人に告げて曰く、諸子いふことなかれ。放屁藝ある事は我嘗てこれ

を知る。大坂千種屋清右衛門といへる者、をかしき樂を賣るが好にて、喧嘩下し尻ひり樂等の簡板を出す。其樂方も聞き得たれど、それは只尻の出るのみにて、筒様の曲案を放ることを聞かず。又仕掛ならんと疑ひ尤に似たれども、竹田の舞臺に事替り、四方正面のやりばなし、しかも不埒の取しまり、何に仕掛の有りと見えぬ。數萬の人の目にさらし、仕掛の見えぬ程なれば、譬仕掛有りとて、眞にひると同前なり。衆人眞に放るといはず、其糟を食ひ其泥を濁らして放ると思つて見るが可し。扱つくくと案ずれば、かく世智辛き世の中に、人の錢をせしめんと、千變萬化に思案して、新しい事を工めども、十が十餅の形、昨日新しきも今日は古く、固より古きは猶古し。此放屁男計は咄には有りといへども、覷見る事は、我日本神武天皇元年より此年安永三年に至りて、二千四百三十六年の星霜を経るといへども、舊紀にも見えすいひ傳にもなし。我日本のみならず、唐土朝鮮をはじめ、天竺阿蘭陀諸の國々にもあるまじ。於戲思ひ付きたり能く放つたりと、譬むれば一座皆感心す。遙未座より聲を掛け、先生の論甚だ非なり、余申すべき事有りと出づるを見れば、頃日田舎より來りたる石部金吉郎といへる侍なり。以ての外の色にて、扱々苦々數事を承る物かな。それ芝居見せものの類、公より御免あるは、人を和するの術にして、君臣父子夫婦兄弟朋友の道をあかし、譬へば大

星由良介が仕打は忠臣の鑑と成り、梅枝が無間の鐘は女の操をすゝむるなり。見せものの異様なるも、親の罪が子に報い、狩人の子は蹄と成り、悪の報は針の先、必ず人々油断するなどの教なるに、近年は只錢まうけのみに掛り、筒様の所へ心を用ひず、剩さへ屁ひり男の見セ物、言語道断のことなり。夫屁は人中にて撒るものにあらず、放るまじき座敷にて、若し誤つてとりはづせば、武士は腹を切る程恥とす。傳へ聞く、品川にて何とかいへる女、客の前にてとりはづせしが、其座に小田原町の李堂、堺町の巳なんど居合せて笑ひけるに、彼女忍び兼ね、一間へ入りて自害せんとするを、傍輩の女が見付け、さまざまに諫むれども、一座がかの通り者なれば、悪口にいひふらされ、世上の沙汰に成るなれば、どうも生きては居られぬとのせりふ。彼二人も詞を盡し、此事決していふまじとひたすらになだむれども、イヤ／＼今こそ左様に請がひ給へ、跡にていひ給はんは必定、生きて恥をさらさんよりは、死なせてたび給へとかきくどき、とどまる氣色あらざれば、二人もすべき方なくて、此事口外せまじきよし證文を書いて、漸く自害をとどめしとかや。可咲事の様なれど、女が自害と覺悟せしは、情を商ふ身の上にて、恥を知りて命を捨てんといひ、又いき過の通者も惻隱の心ありて、おほづけなくも證文書いて人の命を助けしは、又艶しき事ならずや。かく人の恥とする事を、大道端に簡板を掛け、衆人

の目にさらす事、無賤千萬此上なし。見せるものは錢まうけ、見るが鈍漢なりと思ふに、先生雷同し給ふ事、見限り果てたる事なり。盗泉の水勝母の地、皆其名をさへ悪むなり。非禮聞くことなかれ非禮見ることなかれとは聖人の教なりと、青筋ばつてのいひぶん。予答へて曰く、子が辭甚だ是なり、去ながらいまだ道の大なる事を知らず。孔子は童謠をも捨てず、我亦屁ひりを取る事論あり。夫天地の間に有るもの、皆自から貴賤上下の品あり、其中に至り極りて下品とするもの、大小便に止る。賤き譬喩を漢にては糞土といひ、日本にては尿のごとしと。其糞小便のきたなきも、皆五穀の肥となりて萬民を養ふ。只屁のみ、撒た者暫時の腹中、快き計にて、無益無能の長物なり。上天のことは音もなく香もなしといふに引きかへ、音あれども太鼓鼓の如く聞くべきものにあらず、匂あれども伽羅麝香の如く用ふべき能なし。却つて人を臭がらせ、韭菜握屁と口の端にかより、空より出でて空に消え、肥にさへならざれば微塵用に立つことなし。志道軒が腐儒をさして屁びり儒者といひ初めしも、尤千萬の詞なり。斯ばかり天地の間に無用の物と成り果てて、何の用にも立たざるものを、こやつめが思ひ付にて、種々に案じさまざまに撒りわけ、評判の大入、小芝居などは續くべき勢ならず。富三一人が大當りは菊之丞が餘光も有り、屁には固より餘光もなく惚人もなく最貞もなし。實に生正味むき出

しの眞劍勝負、二寸に足らぬ屁眼にて、諸の小芝居をまくりに撒り潰す事、皆屁威光とは此事にて、地口でいへば屁柄者なり。されば諸の音曲者、いふべき筈の口、語るべき筈の咽を以て、師匠に随ひ口傳を請け、高給金はほしがれども、聲のよしあしは生れ付、月夜鳥や五位鷺のがあくくと鳴くがごとく、古き節の口眞似はすれども、微塵も文句に意なく、序破急開合節はかせの鹽梅を知らざれば、新淨瑠璃の文句を殺し、面々家業の衰微に及ぶ。然るに此屁ひり男は、自身の工夫計にて、師匠なければ口傳もなし。物いはぬ尻分るまじき屁にて、開合呼吸の拍子を覚え、五音十二律自から備り、其品々を撒り分ける事、下手淨瑠璃の口よりも、屁の氣取が拔群よし、奇とやいはん妙とやいはん、誠に屁道開基の祖師なり。但し音曲のみに限らず、近年の下手糞ども、學者は唐の反古に縛られ、詩文章を好む人は、韓柳盛唐の鈔屑を拾ひ集めて柱と心得、歌人は居ながら飯粒が足の裏にひびり付き、醫者は古法家後世家と、陰辨慶の議論はすれども、治する病も療し得ず、流行風の皆殺し。俳諧の宗匠顔は芭蕉其角が涎を舐り、茶人の人柄風流めくも、利休宗旦が糞を嘗める。其餘諸藝皆衰へ、己が工夫才覺なければ、古人のしふるしたる事さへも、古人の足本へもとどかざるは、心を用ひざるが故なり。しかるに此放屁漢、今迄用ひぬ臀を以て、古人も撒らぬ曲屁をひり出し、一天下に名を顯す。陳平

が曰く、我をして天下に宰たらしめば又此肉の如けん。我も亦謂へらく、若し賢人ありて此屁の如く工夫をこらし、天下の人を救ひ給はど、其功大ならん。心を用ひて修行すれば、屁さへも猶かくの如し。阿呼濟世に志す人、或は諸藝を學ぶ人、一心に務むれば、天下に鳴らん事屁よりも亦甚し。我は彼の屁の音を貸りて、自暴自棄未熟不出精の人々の睡を寤さん爲なりといふも又理屈臭し。子が論屁の如しといはどいへ、我も亦屁ともおもはず。

跋

漢にては放屁といひ、上方にては屁をこくといひ、關東にてはひるといひ、女中は都ておならといふ。其語は異なれども、鳴ると臭きは同じことなり。その音に三等あり、ブツと鳴るもの上品にして其形圓く、ブウと鳴るもの中品にして其形飯櫃形なり。スーとすかすもの下品にて細長くして少しひらたし。是等は皆素人も常に撒る所なり。彼放屁男のごとく、奇々妙々に至りては、放らざる音なく備らざる形なし。抑いかなる故ぞと聞けば、彼が母常に芋を好みけるが、或夜の夢に火吹竹を呑むと見て懐胎し、鳳屁元年へのえ鼬鼠の歳、今を春邊と梅匂ふ頃誕生せしが、成人に隨ひて段々功を屁ひり男、今江戸中の大評判、屁は身を助けるとは是ならん歟。讃岐の行脚無一坊、神田の寓居に筆を採る。

放屁論後編自序

倭學先生曰く、夜はおよるの上略にて、晝とは諸人目を寤せば小便をたれ屁を撒る故、夜晝の倭訓起れり。或は鯨淺き所に寐入りたる内、潮引きて洲となる時は、大に困りて無術氣を撒る、故に潮の引くをも干るといふ。此道を好ませ給ふ御神を、蛭子といひえびすといふ。えびすはへびすの間違にて、あいうえおはひふへの通韻より誤り來れり。又日本武尊東夷征伐の時、夷ども、草に火をかけ、大勢一度に尻をまくりて撒りければ、焔尊の方へ吹き躰き、御身に火掛らんとする時、御劍をぬいて投付け給へば、夷の臀をしたよかに切られ八方へ逃げし故、逃ぐる事をへきえきといひ始め、(へきえきとは屁消益なり。屁消えて尊の爲に益あるをいふなり)十束の御劍を改めて臭薙の寶劍と號け給ふ。臭き物を薙ぎちらせしといふ詞なり。太政入道清盛は火の病を煩ひ、初は居風呂桶に水を入れて體を浸せば、即時に湯となる故、後は大なる池を掘り、加茂川の水を堰き入れ這入れられるに、水火激して頻に屁を撒りしに、より、屁池の大將と異名せられ、記せし記録を屁池物語といふ。後世平家と書くは當字なり。

また兵衛佐頼朝卿伊豆の國へ左遷の内、貧乏にて常に芋飯を喰ひ、好んで放屁なされける故、其所をひるが小島と號けたり。野にて放るを野邊といひ、山にて撒るを山邊といふ。古今集の歌に、

霞立つ春の山屁は遠けれどふく春風は花の香ぞする

海邊といひ磯邊といひ、澤邊の螢は屁に縁あり。奥州に一の戸二の戸、古戸の字をへと訓ぜしも、家あれば人あり、人あれば撒る故なりと、倭訓の講釋 聞取法問、出まかせに放出して、此書の序とはなりけらしブツツ。

風 來 山 人 誌

放 屁 論 後 編

世の諺に、剪選するも浪人の習ひと、御所櫻の伊勢の三郎、風俗太平記の日本左衛門などと、淨瑠璃本にある時は、さも手強う侍らしく聞ゆれども、夫は血臭い時節の事にて、かく治まれる時世に、そんなけびらひが有るや否、とんだ目にあふ故に、今時の浪人は紙子羽織に破編笠、御子孫も御繁昌、猶いつまでか活延るほど恥の上ぬり。但浪人のみにあらず。春さきの華臍魚と目出度御代の侍は、段々に直が下り、工農商の三民に養はれる素餐の様に思はれ、まさかの時は侍でなければ世は治らず、日本は小國でも、唐高麗から指もさよせぬは皆武徳なりといふ事を、思ひ出す者もなきは、是ぞ誠に太平の世の御恩澤、井を鑿りて飲み耕して食ふ、提燈かりた禮はいへども、月日に禮はいはざるに等し。段々太平の化にあまへ、世上一統金銀にのみ目が付く故、先祖はお馬の先に進み、義は金鐵よりも堅く、命は塵芥よりも輕しと、踏止まつて高名を顯したる家柄の子孫でも、又君を諫め萬民を教へ、國家の礎を堅うせんと心を碎く忠臣でも、算盤の桁には合はず、見一無頭早急に金にならねば、二一天作言語道斷、六沈が二進

雪隠が決ちん、穴のせまい仕送り用人に乘越され、扱はお家に由緒ある數代出入の町人でも、不如意になれば安くあしらひ、昨日今日まで手代奉公、年季野郎の成上りでも、金さへ持てば追從輕薄、御堅勝御安全、様の字までをひねくり廻して六ヶ敷認めるは、地獄の沙汰も金次第、金が敵の世の中。されば歌にも、

鉦敲金がないゆゑ鉦たよく金があるなら鉦はたよかじ

又それに付けても金のほしさよといへる下の句は、いづれの歌にも連屬すると卑劣千萬に覺え、富十郎が鐘入も金の供養といふ故に、若し才覺の計策にもと、味な所へ目のつく世の中。此間さる方にて段々と不如意に付き、一家中鐘の稽古を止にして、鈴の稽古が初まりしとの噂、よくよく聞けば、鐘といふ字は金篇に遺ふといふ字、鈴は金篇に令るといふ字なれば、遺ふ事を止めにして只々金を令めよと、あて字ながらも主命は黙止がたし。いかなる名人達人でも、金なき衆生は度しがたしと、佛もあちらむくと見えたり。いつの比にか有りけん、江戸神田の邊に、貧家錢内といへる見る陰もなき瘦浪人あり。抑彼が系圖といッば、忝くも天兒屋根命の苗裔、大織冠鎌足公の御子藤原淡海公、讃州志度の浦にて海士人と野合ひ、かの面向不背の玉を採得給ふ時、一日を六十四文で人足に傭はれ、浦人よろこび引上げたけりと諺にも作られ、戯場でし

ても、名もなきはいく、伎者のする浦人の嫡流なり。母夢に遊團扇を呑むと見て懐胎し、此者を産みしより、貧乏神を氏神と仰ぎ、七福神と喧嘩して、故郷を去つて江戸の住居。されば諸藝貳百石、無藝高なしとやらいへども、此男何一ツ覺えたる藝もなく、又無藝にもあらざれば、どちら足らずのちくらが洋、磯にもよらず浪にもつかず、流れ渡りの瓢箪で、饅頭の棒燒鰻鱈魚を欺き、見識は吉原の天水桶よりも高く、智恵は品川の雪隠よりも深しと、こけおどしの駄味贈を、千人に一人は實かと聞き込んで、教化的の報謝米で召抱へうと相談すれば、イヤく女は美悪となく宮に入つて婿まれ、士は賢不肖となく朝に入つて悪まる。比喩を鳥で申さうなら、孔雀錦鶏鸚哥の類、高金出して弄べども、外飾のよいばかりで、鳥も挿らず晨も司らず、葱線午券の相手にもならず、又烏の男ぶりは悪しけれども、朝は早く起きて人をおこし、吉凶を能く知りて豫告知らせば、忝いといふべきを、烏啼が悪いの、いまくしい烏めのと悪まるるを見るにつけ、良薬は口に苦く、出る杖は打たると習ひ。されども御無理御尤、君君たらず臣臣たらず、八幡大名太郎冠者、脱活の虎見る様に、己が性根は微塵もなく、風次第で首を振つて一生を過さんは、折角親の産付けた罌丸を無にする道理。浪人の心易さは、一簞のぶっかけ一瓢の小半酒、恒の産なき代には、主人といふ贅もなく、知行といふ飯粒が足の裏にひつつ付かず、



後塚真義十七巻画

行き度所を駈けめぐり、否な所は茶にして仕舞ふ。せめては一生我體を自由にするがまうけなり。斯く隙なるを幸ひに、種々の工夫をめぐらして、何卒日本の金銀を唐阿蘭陀へ引たくられぬ一ツの助にもならんかと、思ふもいらざる佐平次にて、せめては寸志の國恩を報ずるといふもしやらくさし。其位にあらざれば其政を謀らず、身の程知らぬ大呆と、己も知つては居るさうなれど、蓼食ふ蟲も好々と生れ付きたる不物好、わる塊にかたまつて、椽の下の力持むだ骨だらけの其中に、ゑれきてるせゐりていとといへる、人の體より火を出し病を治する器を作り出せり。抑此器は西洋の人電の理を以て考へ、一旦工夫は付けけれども、其身の生涯には事成らず、三代を経て成就しけるといへり。阿蘭陀人といへども知る者は至つて少く、固より朝鮮唐天竺の人は夢にも知らず。況んや日本開闢以來創めて出來たる事なれば、高貴の旁を初として、見ん事を願ふ者夥し。或日去る屋敷の儒官石倉新五左衛門といへる人來りて、觀る事良久うして曰く、天地人の三才に通達するを儒といふ。我天下の書に眼をさらし、理を以て推す時は森羅萬象明かならざる事有るべからずと思ひしが、今是を見て始めて驚く。それ燧と石、扁柏と扁柏相激する歟、又は日輪の水精硝子を照らし、或は鏡に映する時は火を生じ、時に臨んでは目からも出で臍からも出で、扱又貧なる家内へは、火の降る事も有りとは聞けども、か

かる事は思ひもよらず。いかなる理にて火出づるや、後學の爲承らんと。其時主人うち點頭、書を讀む計を學問と思ひ、紙上の空論を以て格物窮理と思ふより間違も出來るなり。さらば火の出る根元をお目にかげんと、取出す小冊に、昔語花咲男放屁論と題號せり。主人笑つて申しけるは、抑此放屁といつば、四年以前兩國橋の邊にて花咲男と號け、見せものにて近年の大當り、諸の小戲場を撒潰せし趣は、此放屁論に詳なり。今年また采女原に出て、三國福平と名乗る。扱此者の身の上を尋ぬるに、父は大和の國吉野の郷の狩人佐次兵衛といへる者なりしが、年來多くの猪猿を殺せし罪亡しとや思ひけん、近所の者兩人といひ合せ、四國順禮に出でけるに、彼の殺生の報にや、伊豫の國に至りて、佐次兵衛生ながら猿と成つて、林の中へ逃入りければ、二人の連はあきれ果て、是非なく國に歸りけり。今童謡に、一ツ長屋の佐次兵衛殿、四國をめぐりて猿となるんの、二人の連衆は歸れども、お猿の身なれば置いて來たんのとは此事因縁なり。さて兩人は國に歸り、俸福平に此譯を語れば、一ト方ならぬ歎なれども、なすべき様もあらざれば、せめては父が現世未來畜生道の苦患を免るゝ爲にとて、一切經を供養せんと思ひ立ち、鳥が鳴く東路を、錢がなくくたどり著き、本錢の入らぬ金まうけを工夫して、いつとなく屁を比類なき、親孝行の奇特にや、兩國橋の屁撒と江戸中の大評判。夫よりも

浪花津に咲くや此花咲男、今を春屁と咲くや此、花の都に匂ひ渡り、再び江戸へ歸り咲、三國福平と名乗りて、采女原の春體、立つ子這ふ子も知らぬ者なし。扱佐次兵衛と連になり、四國をめぐりし兩人も、目前かよる不思議を見、且は福平が志を感じ、佐次兵衛が追善供養、共に力を合さん爲、空也上人の鉢扣、茶笏賣より思ひ付き、歌念佛を趣向して、六字を飴にねりませ、うまひだ、うまい陀佛うまいだより様々の替唱歌。扱當世の立者は、仲藏幸四郎三五郎、また半道のきよ者は、時に大谷友右衛門。最巖市川團十郎は、木場についての親父分、其癖年は若いだ。若い陀佛若い陀と賣歩行、大評判に預りしも、皆福平が孝行のなす所、古今にまれなる屁柄者と語りければ、新五右衛門一圓に呑込まず、不思議の事を承るもの哉、いかにも彼撒糞漢、先年兩國にては流行しかど、此度采女原へ出でたれども、其後は聲もなく臭もなく、今は世間に沙汰もなし。當時諸方にて評判の品々は、飛んだ靈寶珍しき物、十月の胎内千里の車、鹿に兩頭あれば猿に曲馬あり、穢銀杏が辨説には、蘇秦張儀も跣足で逃げ、友世綱世が力には、巴、坂額干鱈持つて禮に來る。源水が獨樂は魂ありて動くがごとく、鶴市が聲色はその人そこに在るが如し。新之助は一身に骨なく、どう突請身は五臟金鐵にや有らん。大魚出れば大蛇骨出で、硝子細工牽絲傀儡、古きを以て新しく、田舎道者の目を悦ばしめ、鳥娘は名にてくるめ、人

魚は人をちやかすなり。子供角紙の取組は、河津股野が佛をうつし。戰鶏相撲の勝負には、魯の季桓子拳を握る。馬の立合狗の藝、仕込に馴れ教に順ふ。是を思へば人竝に人別帳には付きながら、畜生に劣りたる無藝の者は、心にて己が恥を思ふべし。あるが中にも險竿の大當り、小櫻松江が笑顔には、弘法大師筆を捨て、韓退之涎を流す。無三飛新藏が體は、龍骨車のめぐるがごとく、早飛梅之丞が一本綱は、五體を天へ釣るかと疑ふ。是等をして珍しともいふべけれ。何ぞや古き屁撒を、ことごとく、敷長物語、拙者屁の講釋を聞きには參らず、彼のゑれきてるより火の出る道理を聞かんとこそ望みしに、以の外の屁あしらひ。さては我らを屁の如く思ひ給ふやと、眞黒になつて立腹す。其時錢内詞を和らけ、ゑれきてるより火の出る道理を、聞かんとお尋あれども、一天四海引くるめての大論にて、一朝一夕に論じがたし。能く近く譬を取つて教へん爲、扱こそ屁論に及びたり。夫佛法に地水火風空を五輪といへども、空と風とは體用にて、つまる所は四大なり。此水火土氣は天地の間に滿々たる故、固より人の體中に備へたれば、四の物皆體中より出るなり。日々の食物糞と成つて五穀の肥となる。これ人間の體より土の出るにあらずや。又小便となり汗と成るは體中水を出すなり。上に在つては呼吸、下に在つては屁と號く。是體中氣の出るなり。あるが中にも、火といへるが萬物造化の座元にて、そ



の本を大陽と號づけ、その末を火と號づく。日と火の倅訓同じきも天地自然の道理なり。されば神に天照太神、佛に大日如來、金剛界とは地上をさし、胎藏界とは地下をさす。十萬億土無量壽佛、反照自己本來空、祕密も悟道も引きくるめて、此日輪ましまさざれば、土は皆本體の石、水は皆本體の氷なる故、草木を生ずる事なく、魚鱉を育すべき道なし。伎者あつても、座元なければ、戲場の出來ざるに異ならず。かゝる道理を知る時は、糞と成るも汗となるも、屁の出るも火の出るも、同じ體の小天地、固より怪しむに足らざれども、理にくらき輩は、燧より出る火は常となる故怪まず、ゑれきてるより出る火は、飯綱幻術の様に心得、又は關振手づま人形と一ツ事に覺え、慰に呼んで見る旁も多き中に、天文曆數酸いも甘いも吞込んだ親玉をはじめ、理に通達せるからは、問ふに骨ありて答ふるにはづみあり。人の分量智惠の程を知らざる人は、僅の藝をいひ立に口過する浪人者や、日待月待に召さるゝ雜劇の藝者同様に心得たるぞ苦々し。凡天地の間に火程尊き物なく、その火の道理を目前に喩す故、ゑれきてるほど尊き器なし。又吾日本、神武帝より今年まで二千四百三十九年。死んで生れて入替る人其數かぞへ盡されず。其大勢の人間の知らざる事を拵へんと、産を破り祿を捨て、工夫を凝らし金銀を費し、工出せるもの、此ゑれきてるのみにあらず、是まで倭産になき産物を見出せるも亦少からず。世間の

爲に骨を折れば、世上で山師と譏れども、鼠捕る猫は爪をかくす、我よりおとなしく人物臭き面な奴に、却つて山師はいくらもあり。人は藝を以て山の足代とし、我は山に似たるを以て藝の助とす。顯るゝと隠るゝとは、譬へばあん餅とあんころ餅の赤小豆の如し。まこと金をほしく思うて、是までの精力を一圖に金銀計に凝りて、一生鰥鼠見る様な親父と成り、生爪はもがれても握つたる金は放さず。徒然草にある通り、假にも無常を觀すべからず。人は悪しかれ我善かれ、義理も絲瓜も瓢箪も、沈香も焚かず屁も撒らず、上手名人といふは扱置、下手といはるる藝もなく、食うて尿して寐て起きて、死んだ所で残る物は骨と證文ばかりなりといふ様なわかちも知らず、彌、出るなら無間の鐘の蛭は扱置、蝮蛇や龍盤魚を糞でこくせうに煮て食はせても食ふ氣に成つてためる時は、盲でさへも出來る金、出來ざる事もあるまじく、近い例は、ゑれきてるを兩國か淺草の見せ物に出す時は、押へ付けたる大金、豪猪綿羊などの例もありとすむる者も多けれど、陰陽の理を盡せし物を、勿體なしと合點せず。されば會子は鮎を見て老を養はん事を思ひ、盜跖は錠を明けん事を思ふ、それ相應の了簡。我は綿羊を見て、日本にて羅紗らせいたごろふくれんしよんとろめんへるとあんさるせ毛氈類の毛織を織らせ、外國の渡りを待たず用に給せんと心を碎き、人は手短に錢をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類ち

やとて、毛を織りて國家の益にもなる物を、らしやめんなど、あてじまいな名をつけ、繪具
 で體を塗りちらし、引ずり廻して恥をさらす、綿羊の手前も氣の毒なり。世にある人は錢をほ
 しがり、錢なき者は意地をはり、渴しても盜泉の水を飲まず、道理で南瓜が唐茹にて、いらざ
 る工夫に金銀を費す故に錢内なり。夫熟惟みれば、骨を折つて譏らるゝは、酒買うて尻切ら
 るゝ、古今無雙の大だはけ、屁の中落とは是ならん。けふよりゑれきてるをへれきてると名を
 かへ、我も三國福平が弟子となり、故郷をかたどりて四國猿平と改名し、屁撒藝の仲間へ入り、
 芋連中と參會して、尻の穴のあらん限り撒り習はどやと存するなり。臭い者の身知らず、以來
 御用捨下さるべしと、屁撒つて後の尻すほめ、まじめになつていひければ、新五左衛門あき
 れた顔にて、兎角是は古方家に下させずは、此疳癪はなほるまいと、つぶやきながら歸ると見
 て、眼らぬ夢は覺めにけり。

追加

去る申の歳、菅原櫛といへるを工み出し世に行はれける時、好人より狂歌を賜ひしその返
 歌、并に序を爰にしるす。

用ひれば鼠の子も上尖竿をおほえ、用ひざれば虎皮、禪も地獄の古著店に釣さるとは、とつと
 昔の唐人の寐語。眞實で呵らるゝより、座なりに譽めらるゝが、快きは人情なれば、虚言と追従
 輕薄をいはねば、人當世を知らぬといふ。抑此當世といふもの、今ばかり有るにあらず。祝鮫
 が倭有つて宋朝が美あらずんば、難乎今の世に免れんこととあれば、昔より有來の當世を知
 て、八百藏が助六は柏筵が助六なれども、人今更の様に心得るも片腹いたし。我も此當世を知
 らざるにはあらねども、萬人の盲より一人有眼の人を思つて、假にも追従輕薄をいはざれば、
 時にあはぬは持前なり。されども人と生れし冥加の爲、國恩を報ぜん事を思つて心を盡せば、
 世人稱して山師といふ。牙戯れて曰く、智惠ある者、智惠なき者を譏るには、馬鹿といひ、た
 はけと呼ぶ。あはうといひ、べら坊といへども、智惠なき者智惠あるものを譏るには、其詞を

用ふることあたはず、只山師々々と譏るより外なし。又造化の理を知らんが爲、産物に心を盡せば、人我を本草者と號け、草澤醫人の下細工人の様に心得、已むに賢るのむだ書に、淨瑠璃や小説が當れば、近松門左衛門自笑其積が類と心得、火浣布ゑれきてるの奇物を工めば、竹田近江や藤助と十把一トからけの思ひをなして、變化龍の如き事を知らず。我は只及ばずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。或は適大諸侯の爲に謀りし事ども、國家の大益なきにしもあらざれども、狡兎死して良狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏る、細工貧乏人寶、嗚呼薄いかな我耳垂珠と悟を開き、露命をつなく營に、當時賤しき内職にて、其槽をくらひ其錢をせしめんと思ひ付きしを、早くも卯雲木室君に尻尾を見出され、おくり賜はる狂歌に、

酔うて来て小間物見せのおて際は仕出しの櫛もはやる筈なり

實や己を知らざるに屈して、己を知るに伸びるとなんいへば、此御答申さんとて、はがまよ八百を書きちらす。固より己を知らざる人に見せるにはあらず。嵐音八が曰く、ア、氣が違うたさうな。

かよる時何と千里のこまものや伯樂もなし小づかひもなし

風 來 山 人 誌

跋

風來山人放屁論後編をひり出して、予をして尻へに蹴せしむ。按ずるに放屁字典に曰く、屁ブブウの反音ブウ、去聲に發して音スウ。論語に所謂、舞雩に風して詠じて歸らんとは、それこれ是をいふ歟。此書や、始には狂言綺語のすかし屁を放り、中は萬物の理を掌に握り屁の極意をこき、未又合うて一ツ屁の尻をすほむ。讀者その臭を逐はど、高に升る階梯屁の一助たらんと云爾。

葛西土民姑射杜老糞船の中に書す



田判官景連、手の者引くし追取巻き、「ソレ遁すな」と下知すれば、心得兵庫は若君を道念に抱かせて、當るを幸なきちらせば、むらくばつと逃ちるを、遁さじやらじと追うて行く。其隙に江田判官、二人の繩付助けん、立寄る所に不思議やな、華表の笠木落ちかより、清忠景連、島山、壓に打たれて一時に、みぢんに成つて死してけり。コハふしぎなる神徳と、勅使も感涙義岑公、兵庫助を始として、有合ふ人々下部迄、ハット計に三拜九拜。實に著き靈驗は、響の聲に應ずるごとく、水清ければ月やどる、諸願成就長久の、君と神との道直に、榮ふる御代こそ目出度けれ。

平賀源内集終

大正六年八月一日印
大正六年八月四日發行

有朋堂文庫
平賀源内集 (非賣品)

編輯者 塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

發印刷者兼 三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所 有朋堂印刷部

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所 有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製